日本海スルメイカ漁場調査　— 抄録 —

鈴 木 史 紀・田 中 裕 憲・青 山 宝 蔵

発 表 誌 名

イカ釣り漁場開発資料17号（平成４年５月）及び平成３年度外洋性イカ（スルメイカ・アカイカ）に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集（平成４年５月）

抄　録（日本海沿岸海域調査）

平成３年５月から９月に試験船東奥丸で北緯39度から43度、東経 138度以東の日本海沿岸域で北上期から南下初期の群を対象に漁場調査を実施した。また、６月から９月に試験船青鵬丸で本県日本海沿岸域で実施したマグロ延縄漁場開発試験で行ったイカ釣り漁獲試験結果も併せて資料とした。

1．沿岸域におけるスルメイカの水揚げ動向について

本県日本海側の主要４港（深浦、鰺ケ沢、下前、小泊）における1991年の沿岸スルメイカの水揚げ量は 3,974トンで昨年の 110%であった。ここ10年間では、89年に次ぐ高い水準であった。また、１隻１操業当り漁獲量は 408kgで、ここ10年間では '89年並みの高い水準であった。

1991年の初水揚げは５月20日に小泊港でみられた。

2．沿岸域における漁場環境、分布、群の性状、移動について

(イ)　漁場環境について

1991年の定線海洋観測結果から本県沖合の対馬暖流域の勢力は３・４月は平年をかなりからやや強勢であったが、５・６月には平年並みに戻り、７・９月にはやや弱勢に転じた。（流量指標より）

(ロ)　スルメイカの分布密度について（釣機１台１時間当り漁獲尾数）

５月下旬の沿岸域の密度は１尾以下と低く、来遊環境は平年並みに推移したものと考えられる。

６月は比較的高い密度で、本県沿岸域での漁獲水準が高かったことを反映していたものと考えられる。７・８月の分布密度は比較的低く、この時期の群の主体はすでにこの海域から北上していたものと考えられる。９月は１～２尾と低かったものの広い海域に分布がみられ安定していた。

(ハ)　群 の 性 状

測定個体数が少ない月もあるが、５～９月における沿岸域に来遊した群の性状を外套長組成並びに成熟・交接状況等からみると、５月は春・夏、秋、冬生まれ群の３群で構成されていたものと考えられる。６月は春・夏、秋、冬生まれ群の３群で構成され、成熟した群は秋生れ群と春・夏生まれ群、小型未成魚群は冬生まれ群であったものと見られる。７月以降の群構造は秋、冬生まれ群が主体となり、７月・９月の成熟イカは秋生れ群で、小型イカは冬生れ群であったとみられる。

(ニ)　沿岸域における群移動

６月６～７日男鹿半島沖で1,100尾の標識放流を実施。再捕尾数は38尾で再捕率は3.5%であっ

た。移動状況は、本県日本海側沿岸域から津軽海峡西口周辺、北海道沿岸域と沖合域、津軽海峡から岩手県沿岸部で再捕された。６月７～８日佐渡北沖で50尾実施。再捕尾数は２尾で再捕率は４％であった。山形県沿岸域と、北海道北部沿岸域でそれぞれ１尾再捕された。

＊　沿岸域とはイカ釣標本船の資料を整理する際に利用している漁場区分のＡ海域に従った。

抄　録（日本海沖合海域漁場調査）

平成３年５月から９月に試験船東奥丸で北緯37度から44度、東経 131度以東の日本海沖合域で北上期から南下初期の群を対象に漁場調査を実施した。

１．沖合域におけるスルメイカの水揚げ動向について

日本海沖合域のスルメイカは主として凍結して水揚げされるが、本県での主たる水揚げ港である八戸港には24,433トンの水揚げがみられ、昨年の 111％であった。

２．沖合域における水温環境、分布、群の性状、移動について

(イ)　水温環境について

日本海漁場海況速報№452～455号までの６月上旬から９月上旬までの海況図並びに平成３年度イカ類資源・漁海況検討会議資料（資料日本海区水産研究所）から対馬暖流域の海況の動向を見ると、表面及び50m水温は、平年に比べ、３月までの冬季は“やや高め”、４～６月の春季は“並み”、７～９月の夏季は“やや低め”、10～11月の秋季は“並み”となっていた。

50m深における極前線は、大和堆以東ではほぼ平年並みの位置に形成されていたが、大和堆以西の対馬海盆付近では著しく南偏していた。暖水域は、６月までは、ウツリョウ島付近・隠岐諸島北沖・柴山北沖・能登半島北沖・佐渡島沖などにあり、それらの中間には冷水域が形成されていた。７月以降は隠岐諸島と柴山沖の暖水域が合体して、隠岐諸島の北東へ張り出す形に変わった。冷水域の規模は平年に比べ、浜田沖のものは通年やや大きかった。他は、９月まではやや小さく、10月以降並みになっていた。

(ロ)　スルメイカの分布密度について（釣機１台１時間当り漁獲尾数）

５月にＢ・Ｃ海域には、濃密な群の形成はみられなかったが、両海域の沿岸寄りで密度が高い傾向がみられた。６月はＣ海域の佐渡沖海域では濃密な群の形成はみられなかった。一方、南下群を対象とした９月のＤ海域の分布密度は低かったものの、同時期に実施したＡ海域の分布密度と同程度であったことから、低い密度ながらも安定していた海域といえる。

(ハ)　群　の　性　状

日本海沖合域に来遊した群の性状は外套長組成、成熟と交接状況及びその組成から、５・６月のＢ海域では春・夏、秋、冬生まれ群の３群が混在し、群の主体は秋生まれ群とみられる。Ｃ海域では５月は春・夏、秋、冬生まれ群の３群が混在し、冬生まれ群の割合はＢ海域より高くなっているものの、主体は秋生まれ群とみられる。６月は冬・秋生まれ群が主体となり、９月は秋生まれ群並びに冬生まれ群であったものとみられる。一方Ｄ海域の９月は秋生まれ群が主体とみられる。

(ニ)　沖合域における群移動

５月24～25日に大和堆南西海域で175尾標識放流を実施した。再捕尾数は４尾で再捕率は2.3％であった。北東方向へ移動した群は北海道の奥尻島沿岸域と積丹沿岸域、南東方向へ移動した群

は若狭湾沿岸域で２尾再捕されている。

＊　沖合域での漁場区分はイカ釣標本船の資料を整理する際に利用している漁場区分Ｂ～Ｄ海域の区分に従った。